教育研究業績書

2026年11月06日

所属： 食物栄養学科　　資格： 准教授　　氏名： 安達　真一

研究分野	研究内容のキーワード
栄養化学、食品機能学	油脂、高嗜好食品、嗜好性、ポリフェノール、高尿酸血症、痛風、機能性食品
学位	最終学歴
博士（農学）	京都大学大学院農学研究科食品生物科学専攻博士後期課程単位取得満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
1.血中尿酸値低下作用を有する物質のスクリーニング法	2019年3月1日	矢ヶ崎一三，安達真一 特許第6486259号
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1.実験動物管理者（関西福祉科学大学）	2020年4月～2026年3月	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1.Elucidation of the central role of long-chain fatty acids in the palatability of dietary fat by neuroscientific and animal behavioral studies（油脂の嗜好性における長鎖脂肪酸の果たす中心的役割に関する神経科学・動物行動学的研究）	単	2015年1月	京都大学	細胞工学的手法および動物行動学的手法を用いて、長鎖脂肪酸の嗜好性および報酬価は、長鎖脂肪酸のGPR120への化学受容を介していることを明らかとした。これは、油脂に含まれる長鎖脂肪酸が油脂の嗜好性に関与していることを示唆する。
3 学術論文				
1.Tiliroside Suppresses Uric Acid Production in Hepatocytes and Attenuates Purine-Induced Hyperuricemia in Male ICR Mice（査読付）	共	2025年9月	Molecules Vol. 30(19), 3914	Shin-ichi Adachi, Shinji Kondo, Yusuke Sato, Fumiaki Yoshizawa, Kazumi Yagasaki. ローズヒップなどに含まれるtiliroside の抗高尿酸血症作用を評価した。tiliroside は、培養細胞およびモデルマウスで尿酸値低下作用を示し、肝臓での尿酸産生抑制や腎臓の尿酸再吸収関連因子への作用が示された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2.The 'Meat Cooking Paradox' : Why raw and rare meat still appeals - insights from a mouse model（査読付）	共	2025年5月	Applied Food Research Vol. 5(1), 100914	Yoriko Sato, Yorimune Oki, Naohisa Nakao, Reina Matsunaga, Daisuke Sato, Yusuke Komiya, Shin-ichi Adachi, Yusuke Sato. マウスを用いて生肉と加熱肉の嗜好性を比較した。馬刺しや牛肉のたたきなどの未加熱・短時間加熱肉は、加熱肉より好まれる傾向があり、水溶性成分や香りが嗜好性に影響している可能性があることを示している。
3.Antidiabetic Effect of Urolithin A in Cultured L6 Myotubes and Type 2 Diabetic Model KK-Ay/Ta Mice with Glucose Intolerance（査読付）	共	2024年1月24日	Current Issues in Molecular Biology Vol. 46(2), 1078-1090	Shinji Kondo, Shin-ichi Adachi, Wataru Komatsu, Fumiaki Yoshizawa, Kazumi Yagasaki. 培養L6筋細胞および２型糖尿病モデルマウスの抗糖尿病作用に対するウロリチンA(UrA)の効果について解析を行った。UrAは筋細胞のグルコース取り込みを促進し、その作用はPI3K/AktおよびAMPKを介したGLUT4の細胞膜へ移行によることが示唆された。モデルマウスを用いたIPGTTにおいて、UrAが血糖値の上昇を抑制することも見出した。
4.Trial Analysis of the Relationship between Taste and Biological Information Obtained While Eating Strawberries for Sensory Evaluation（査読付）	共	2022年12月	Sensors Vol. 22(23), 9496	Keisuke Maeda, Ren Togo,Takahiro Ogawa, Shin-ichi Adachi, Fumiaki Yoshizawa, Miki Haseyama. イチゴを食べた際の官能評価と脳活動の関係について試行的に分析した。脳活動のデータは味覚に関する情報と関連することが示唆された。さらに、食文化に関する情報とイチゴの糖酸比は、脳活動と相関することが明らかとなった。
5.Antidiabetic Effect of Taxifolin in Cultured L6 Myotubes and Type 2 Diabetic Model KK-Ay/Ta Mice with Hyperglycemia and Hyperuricemia（査読付）	共	2021年9月	Current Issues in Molecular Biology Vol. 43(3), 1293-1306	Shinji Kondo, Shin-ichi Adachi, Fumiaki Yoshizawa, Kazumi Yagasaki. 培養L6筋細胞および２型糖尿病モデルマウスのグルコース代謝に対する植物由来化合物タキシフォリン（TXF）の効果について解析を行った。TXFは、PI3K/AktおよびAMPKを介したGLUT4の細胞膜への移行により筋細胞のグルコース取り込みを促進し、TXFの投与はモデルマウスの血糖値および尿酸値等の上昇を抑制した。
6.Quercetin enhances fatty acid β-oxidation by inducing lipophagy in AML12 hepatocytes （査読付）	共	2021年6月	Heliyon Vol. 7(6), e07324	Misato Fukaya, Yoriko Sato, Shinji Kondo, Shin-Ichi Adachi, Fumiaki Yoshizawa, Yusuke Sato. AML12培養肝細胞を用いて、ケルセチンのエネルギー代謝促進作用とその機構を解析した。ケルセチン添加により、ミトコンドリア呼吸および解糖が亢進した。この作用は、AMPKシグナルを介したリポファジー誘導による脂肪酸β酸化の活性化に起因することが明らかとなった。
7.Comparative effects of quercetin, luteolin, apigenin and their related polyphenols on uric acid production in cultured hepatocytes and suppression of purine bodies-induced hyperuricemia by rutin in mice（査読	共	2021年2月	Cytotechnology Vol. 73, pp.343-351	Shin-ichi Adachi, Mifuyu Oyama, Shinji Kondo, Kazumi Yagasaki. O-グリコシドのケルセチン配糖体であるルチンは培養肝細胞およびモデルマウスにおいて尿酸産生・尿酸値を低下させたが、C-グリコシドのアピゲニンの配糖体であるビテキシンではその効果は認められなかった。これより、配糖体の結合様式が尿酸産生抑制能に影響することが示唆された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
付） 8. Antihyperuricemic Effect of Urolithin A in Cultured Hepatocytes and Model Mice（査読付）	共	2020年11月	Molecules Vol. 25(22), Article 5136	Shin-ichi Adachi, Kazunori Sasaki, Shinji Kondo, Wataru Komatsu, Fumiaki Yoshizawa, Hiroko Isoda, Kazumi Yagasaki. エラグ酸代謝物ウロリチンAの抗高尿酸血症作用を、培養肝細胞および尿酸前駆体誘導性モデルマウスを用いて解析した。ウロリチンAは尿酸産生および血中尿酸値を低下させ、その作用は肝臓におけるキサンチンオキシダーゼ活性および一部プリン体代謝酵素発現の抑制による可能性が示唆された。
9. Energy metabolism profile of the effects of amino acid treatment on skeletal muscle cells: Leucine inhibits glycolysis of myotubes（査読付）	共	2020年5月	Nutrition Vol. 77, Article 110794	Reiko Suzuki, Yoriko Sato, Kodwo Amuzuah Obeng, Daisuke Suzuki, Yusuke Komiya, Shin-ichi Adachi, Fumiaki Yoshizawa, Yusuke Sato. 骨格筋細胞C2C12におけるアミノ酸処理のエネルギー代謝への影響を解析した。ロイシン、イソロイシン、リシン、フェニルアラニンおよびヒスチジンは筋管細胞の解糖活性指標であるECARを低下させたが、OCRには影響しなかった。なお、ロイシンによる解糖活性抑制はmTORシグナル非依存的であった。
10. Prolyl－hydroxyproline, a collagen－derived dipeptide, enhances hippocampal cell proliferation, which leads to antidepressant－like effects in mice（査読付）	共	2020年4月	The FASEB Journal Vol. 34, pp. 5415-5423	Dai Nogimura, Takafumi Mizushige, Yuki Taga, Akitoshi Nagai, Sayo Shoji, Nao Azuma, Masashi Kusubata, Shin-ichi Adachi, Fumiaki Yoshizawa, Yukihito Kabuyama. コラーゲン由来ジペプチドであるプロリルヒドロキシプリン（PO）は、マウス強制遊泳試験において抗うつ作用を示した。POの経口投与により、海馬における脳由来神経栄養因子および神経成長因子の遺伝子発現が亢進し、前頭前皮質のドーパミン量が有意に増加した。以上より、POは海馬神経前駆細胞の増殖を介して抗うつ作用を発揮する可能性が示唆された。
11. Extraction of strawberry leaves with supercritical carbon dioxide and entrainers: Antioxidant capacity, total phenolic content, and inhibitory effect on uric acid production of the extract（査読付）	共	2019年7月	Food and Bioproducts Processing Vol. 117, pp. 160-169	Takafumi Sato, Yoshiro Ikeya, Shin-ichi Adachi, Kazumi Yagasaki, Ken-ichi Nihei, Naotsugu Itoh. 農業廃棄物であるイチゴ葉から有用成分回収を目的に超臨界二酸化炭素抽出を行った。20 MPa条件下でエタノールをエントレーナーとして用いた場合、抗酸化能および総フェノール量が最大となり、得られた抽出物は培養肝細胞における尿酸産生を濃度依存的に抑制した。
12. Anti-hyperuricemic effect of isorhamnetin in cultured hepatocytes and model mice: structure-activity relationships of methylquercetins as inhibitors of uric acid production(査読付)	共	2019年1月	Cytotechnology Vol. 71, pp. 181-192	Shin-ichi Adachi, Shinji Kondo, Yusuke Sato, Fumiaki Yoshizawa, Kazumi Yagasaki. ケルセチンの生体内代謝物であるイソラムネチンの抗高尿酸血症作用について、培養肝細胞および尿酸前駆体誘導性モデルマウスを用いて解析した。その結果、イソラムネチンは培養肝細胞における尿酸産生を有意に抑制し、モデルマウスにおいても血漿尿酸濃度を有意に低下させた。これらの作用は、肝臓中キサンチンオキシダーゼ活性の抑制を介することが示唆された。
13. Apobec2 Deficiency Causes Mitochondrial Defects Mitophagy in Skeletal Muscle（査読付）	共	2018年3月	The FASEB Journal Vol. 32,pp. 1428-1439	Yusuke Sato, Hideaki Ohtsubo, Naohiro Nihei, Takane Kaneko, Yoriko Sato, Shin-ichi Adachi, Shinji Kondo, Mako Nakamura, Wataru Mizunoya, Hiroshi Iida, Ryuichi Tatsumi, Cristina Rada, Fumiaki Yoshizawa. 脱アミノ化酵素であるAPOBEC2欠損マウス骨格筋ではオートファジーの亢進が認められた。さらにメタボローム解析から、ミトコンドリ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				ア代謝産物の変化が観察され、オートファジー亢進がミトコンドリア代謝異常に起因する可能性が示唆された。
14. Hyperuricemia in type 2 diabetic model KK-Ay/Ta mice: a potent animal model with positive correlation between insulin resistance and plasma high uric acid levels (査読付)	共	2017年11月	BMC Research Notes Vol. 10, pp. 577-582	Shin-ichi Adachi, Fumiaki Yoshizawa, Kazumi Yagasaki. 2型糖尿病モデルマウス（KK-Ay/Ta）において血漿中尿酸濃度、血糖値およびインスリン抵抗性を解析した結果、高尿酸血症が認められ、高尿酸血症とインスリン抵抗性との間に正の相関が示されたことから、高尿酸血症抑制ファイトケミカルによるインスリン抵抗性軽減の可能性が示唆された。
15. Assay systems for screening food and natural substances that have anti-hyperuricemic activity: uric acid production in cultured hepatocytes and purine bodies-induced hyperuricemic model mice (査読付)	共	2017年8月	Cytotechnology Vol. 69, pp. 435-442	Shin-ichi Adachi, Fumiaki Yoshizawa, Kazumi Yagasaki. 培養肝細胞を用いて、天然物・食品由来成分の尿酸産生抑制作用を評価する検定系の構築を試みた。尿酸産生抑制剤であるアロプリノールおよびポリフェノールの一種であるケルセチンは、本検定系において尿酸産生を添加量依存的に有意に抑制したことから、本検定系は尿酸値上昇を抑制する天然物・食品成分の探索に有用であることが示唆された。
16. Anti-hyperuricemic effect of taxifolin in cultured hepatocytes and model mice (査読付)	共	2017年1月	Cytotechnology Vol. 69, pp.329-336	Shin-ichi Adachi, Ken-ichi Nihei, Yoshiyuki Ishihara, Fumiaki Yoshizawa, Kazumi Yagasaki. イチゴなどに含まれるポリフェノールの一種であるタタキシフォリンの抗高尿酸血症作用を培養肝細胞および尿酸前駆体誘導性モデルマウスで解析した結果、尿酸産生および血中尿酸濃度が有意に低下し、その作用は肝臓におけるキサンチンオキシダーゼ活性の抑制を介することが示された。
17. Mechanisms involved in guiding the preference for fat emulsion differ depending on the concentration (査読付)	共	2015年7月	Journal of Nutritional Science and Vitaminology Vol. 61, pp. 247-254	Kazuhiro Sakamoto, Shigenobu Matsumura, Yoko Okafuji, Ai Eguchi, Shinhye Lee, Shin-ichi Adachi, Mina Fujitani, Satoshi Tsuzuki, Kazuo Inoue, Tohru Fushiki. マウスにおける低濃度の乳化油脂に対する嗜好性の低下は、嗅神経および舌咽神経を遮断したときよりもオピオイド系を遮断したときの方が強く観察された。これは、油脂の嗜好性の形成には嗅神経および舌咽神経よりもオピオイド系が強く寄与することを示している。
18. The opioid system majorly contributes to preference for fat emulsions but not sucrose solutions in mice (査読付)	共	2015年4月	Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry Vol. 79, pp.658-663	Kazuhiro Sakamoto, Tatsuya Okahashi, Shigenobu Matsumura, Yoko Okafuji, Shin-ichi Adachi, Satoshi Tsuzuki, Kazuo Inoue, Tohru Fushiki. スクロースと油脂の嗜好性におけるオピオイド系の寄与を比較するために、マウスにオピオイド受容体拮抗薬を投与し、スクロースおよび油脂に対する短時間の摂食行動を調べた。その結果、油脂の嗜好性はスクロースに比べてオピオイド系により大きく依存していることを明らかにした。
19. Behavioral palatability of dietary fatty acids correlates with the intracellular calcium ion levels	共	2014年12月	Biomedical Research, Vol. 35, pp.357-367	Shin-ichi Adachi, Ai Eguchi, Kazuhiro Sakamoto, Hiroki Asano, Yasuko Manabe, Shigenobu Matsumura, Satoshi Tsuzuki, Kazuo Inoue, Tohru Fushiki. 細胞工学的および動物行動学的手法による解析から、味蕾に発現すると報告されている脂肪酸受容体GPR120の長鎖脂肪酸に対するアゴニスト活性は、口腔内における長鎖脂肪酸の嗜好性および脳内報酬系における報酬価と強く相関することが明らかとなった。これらの

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
induced by the fatty acids in GPR120-expressing cells（査読付）				結果は、低濃度長鎖脂肪酸の嗜好性および報酬価が、口腔内でのGPR120を介した化学受容により発現することを示唆している。
20. Increased levels of extracellular dopamine in the nucleus accumbens and amygdala of rats by ingesting a low concentration of a long-chain fatty acid（査読付）	共	2013年11月	Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, Vol. 77, pp.2175-2180	Shin-ichi Adachi, Yuki Endo, Takafumi Mizushige, Satoshi Tsuzuki, Shigenobu Matsumura, Kazuo Inoue, Tohru Fushiki. 1%リノール酸摂取時のラット側坐核および扁桃体のDA遊離量はコーン油と同様に、ミネラルオイルよりも高い値を示した。このことは、低濃度の長鎖脂肪酸が100%食物油脂に匹敵する報酬価を有することを示唆する。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
1. 油脂の味と嗜好性について	単	2025年3月	関西福祉科学大学総合福祉科学会第15回学術シンポジウム　誰も取り残さない健康作りを目指して　健康課題に取り組みにくい人が取り組むにはどうしたらいいか―柏原市の課題を通して―　関西福祉科学大学	油脂を豊富に含む食品にやみつきになる脳科学的なメカニズム、油脂が口腔内で味として認識されるメカニズム、さらにヒトへの応用としてある長鎖脂肪酸が食品や料理のおいしさを向上させる例について発表を行った。
2. 油脂のおいしさのメカニズム		2021年6月	日本油化学会 油化学関連シンポジウム in 大阪 油のおいしさとその周辺 大阪教育大学 天王寺キャンパス	油脂の高度なおいしさに関するメカニズムについて、油脂の摂取時における脳内報酬系の応答、油脂を口腔内で認識する機構および油脂の嗜好性に対する脳海馬におけるシグナル伝達経路の関与について発表を行った。
3. イチゴの嗜好性に関する動物行動学的研究	単	2019年3月	第103回日本栄養・食糧学会関東支部シンポジウム　イチゴに秘められた機能性と可能性 宇都宮大学峰キャンパス	イチゴの嗜好性に関する動物行動学的研究というテーマで発表を行った。マウスを用いて、in vivo マイクロダイアリシス法によるイチゴ摂取時の脳報酬系の活動の変化、薬理行動学的手法によるオピオイド系のイチゴの摂取行動への関与、およびイチゴの嗜好性に対する脳海馬PI3K(Phosphoinositide 3-kinase)/Akt-mTOR (mammalian target of Rapamycin)経路の関与についての研究成果の発表を行った。
２．学会発表				
1. 食物油脂の嗜好性に対する海馬PI3K/Akt-mTORシグナル伝達経路の関与 Possible involvement of PI3K/Akt/mTOR signaling pathway in the hippocampus in regulation of the preference for dietary fat	共	2024年9月	日本味と匂学会第58回大会 岡山大学	安達真一、小林賢斗、近藤真司、佐藤祐介、水重貴文、吉澤史昭
2. Antihyperuricemic effects of quercetin, isorhamnetin and taxifolin, structurally	共	2019年11月	THE INTERNATIONAL CONFERENCE OF FOOD SAFETY AND HEALTH (FSAH 2019) (Taichung,	Kazumi Yagasaki, Shin-ichi Adachi, Shinji Kondo, Fumiaki Yoshizawa

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
similar plant polyphenols, in cultured hepatocytes and model mice with purine bodies-induced hyperuricemia			Taiwan)	
3.コラーゲン分解物が海馬モノアミン代謝に及ぼす影響	共	2019年10月	日本アミノ酸学会第13回学術大会 岩手大学教育学部教育研究棟（教育系）	野木村大，多賀祐喜，楠畑雅，安達真一，吉澤史昭，水重貴文，蕪山由己人
4.高尿酸血症モデルに対するシークヮーサーエキスの作用	共	2019年7月	日本動物細胞工学会2019年度大会 鹿児島県民交流センター	中村太郎，蟹江祐加，深尾弦貴，松澤正和，市川将，渡辺章夫，安達真一，矢ヶ崎一三，米澤貴之，禹済泰
5.油脂の嗜好性に対する海馬PI3K/Akt/mTORシグナル伝達経路の関与	共	2019年5月	第73回日本栄養・食糧学会大会 静岡県立大学	安達真一，小林賢斗，近藤真司，佐藤祐介，吉澤史昭
6.食脂肪の嗜好性における海馬PI3K/Akt-mTORシグナル伝達経路の関与	共	2019年3月	日本農芸化学会2019年度大会 東京農業大学世田谷キャンパス	小林賢斗，安達真一，近藤真司，佐藤祐介，吉澤史昭
7.Phytochemicals (from Strawberry): their effects on diabetes, hyperuricemia and skin photoaging	共	2018年12月	International Conference on Nutrition and Physical Activity (NAPA2018) (Taichung, Taiwan)	Kazumi Yagasaki, Shin-ichi Adachi, Shinji Kondo, Fumiaki Yoshizawa
8.Antihyperuricemic Effect of Urolithin A in Cultured Hepatocytes and Model Mice	共	2018年11月	The 31st Annual and International Meetings of the Japanese Association for Animal Cell Technology (Tsukuba)	Shin-ichi Adachi, Kazunori Sasaki, Shinji Kondo, Fumiaki Yoshizawa, Hiroko Isoda, Kazumi Yagasaki
9.Antihyperuricemic Effect of Rutin in Cultured Hepatocytes and Novel Hyperuricemic Model Mice	共	2018年11月	The 31st Annual and International Meetings of the Japanese Association for Animal Cell Technology (Tsukuba)	Shin-ichi Adachi, Mifuyu Oyama, Shinji Kondo, Kazumi Yagasaki
10.皮膚光老化ヘアレスマウスモデルに対するイチゴ抽出物の作用	共	2018年9月	第12回日本ポリフェノール学会学術集会 メルパルク京都	近藤真司、阿久津歩夢、篠原日菜子、安達真一、吉澤史昭、野村義宏、蕪山由己人、矢ヶ崎一三
11.Possible involvement of PI3K/Akt-mTOR signaling pathway	共	2018年6月	Nutrition 2018 (Boston)	Kento Kobayashi, Shin-ichi Adachi, Shinji Kondo, Yusuke Sato, Fumiaki Yoshizawa

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
in the hippocampus in the regulation of preference for fat				
12.イチゴ種子抽出物の皮膚老化に対する作用	共	2018年5月	第72回日本栄養・食糧学会大会 岡山県立大学	近藤真司，森傑，安達真一，吉澤史昭，野村義宏，蕪山由己人，矢ヶ崎一三
13.培養肝細胞と高尿酸血症マウスにおけるイソラムネチンの抗高尿酸血症作用の検討	共	2018年3月	日本農芸化学会2018年度大会 名城大学天白キャンパス	安達真一，高見有希，近藤真司，佐藤祐介，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
14.Antidiabetic and antihyperuricemic effects of taxifolin, a polyphenol present in octaploid strawberry, in cultured L6 myotubes and type 2 diabetic model KK-Ay mice	共	2017年10月	IUNS 21st International Congress of Nutrition (Buenos Aires)	Yagasaki Kazumi, Kondo Shinji, Adachi Shin-ichi, Yoshizawa Fumiaki
15.油脂およびスクロース溶液摂取における海馬PI3K/Akt-mTOR経路の関与	共	2017年9月	日本味と匂い学会第51回大会 神戸国際展示場	小林賢斗，安達真一，近藤真司，佐藤祐介，吉澤史昭
16.イチゴポリフェノールの血糖制御に関する作用解析	共	2017年8月	第11回日本ポリフェノール学会学術大会（年次大会） 金沢大学サテライトプラザ	近藤真司，安達真一，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
17.培養肝細胞を用いた天然物・食品由来成分の尿酸産生抑制能の評価	共	2017年7月	日本動物細胞工学会2017年度大会 松山市総合コミュニティーセンター	安達真一，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
18.イチゴポリフェノールの抗糖尿病作用	共	2017年5月	第71回日本栄養・食糧学会大会 沖縄コンベンションセンター	近藤真司，安達真一，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
19.高嗜好性食品摂取における海馬PI3K/Akt-mTOR経路の関与	共	2017年5月	第71回日本栄養・食糧学会大会 沖縄コンベンションセンター	小林賢斗，安達真一，近藤真司，佐藤祐介，吉澤史昭
20.培養肝細胞と高尿酸血症マウスにおけるウロリチンAの抗高尿酸血症作用の検討	共	2017年3月	日本農芸化学会2017年度大会 京都女子大学	安達真一，小松渡，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
21.糖尿病モデルマウスにおけるイチゴポリフェノールの抗糖尿病作用	共	2017年3月	日本農芸化学会2017年度大会 京都女子大学	近藤真司，安達真一，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
22.Assay System for Screening Anti-hyperuricemic Food and Natural Substances: Anti-hyperuricemic	共	2016年11月	The 29th Annual and International Meetings of the Japanese Association for	Shin-ichi Adachi, Fumiaki Yoshizawa, Kazumi Yagasaki

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
Effect of Taxifolin in Cultured Hepatocytes and Model Mice			Animal Cell Technology (Kobe)	
23.２型糖尿病モデルマウスにおける高尿酸血症の発症とインスリン抵抗性との相関	共	2016年5月	第70回日本栄養・食糧学会大会 武庫川女子大学中央キャンパス	矢ヶ崎一三，安達真一 吉澤史昭
24.培養肝細胞と高尿酸血症マウスにおけるタキシフォリンの抗高尿酸血症作用の検討	共	2016年5月	第70回日本栄養・食糧学会大会 武庫川女子大学中央キャンパス	安達真一，高見有希，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
25.細胞培養系を用いた尿酸産生抑制検定系の構築と天然物・食品由来成分の作用解析	共	2016年3月	日本農芸化学会2016年度大会 札幌コンベンションセンター	安達真一，高見有希，小池慎一郎，豊崎美紅，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
26.ロイシンのタンパク質合成促進刺激に対する後肢骨格筋の筋肉ごとの応答の相違	共	2015年10月	日本アミノ酸学会第９回学術大会 滋賀県立大学交流センター	浜田敬太，ピィピョーナイン，高見有希，成田和，前田奈穂，安達真一，菅原邦生，吉澤史昭
27.培養肝細胞での尿酸産生能に対するポリフェノールの作用解析	共	2015年8月	第９回日本ポリフェノール学会学術大会（年次大会） 奈良女子大学	安達真一，小池慎一郎，豊崎美紅，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
28.培養肝細胞を用いた尿酸産生能検定系の構築	共	2015年7月	日本動物細胞工学会2015年度大会 東北大学片平さくらホール	安達真一，小池慎一郎，豊崎美紅，吉澤史昭，矢ヶ崎一三
29.種々の低濃度脂肪酸溶液摂取時の側坐核ドーパミン遊離量の変化	共	2014年10月	日本味と匂学会第48回大会 静岡市清水文化会館マリナート	安達真一，江口愛，坂本和洋，浅野裕基，真鍋康子，松村成暢，都築巧，井上和生，伏木亨
30.脂肪酸代謝阻害が油脂摂取時における側坐核ドーパミン遊離量に与える影響	共	2011年5月	第65回日本栄養・食糧学会大会 お茶の水女子大学	安達真一，遠藤裕紀，松村成暢，都築巧，井上和生，伏木亨
31.食脂肪の嗜好性に対する中脳ドーパミン作動性神経の関与	共	2010年3月	日本農芸化学会2010年度大会 東京大学駒場キャンパス	安達真一，遠藤裕紀，松村成暢，都築巧，井上和生，伏木亨
32.油脂摂取がドーパミン作動性神経活動に与える影響について	共	2009年9月	日本味と匂学会第43回大会 旭川市民文化会館	遠藤裕紀，安達真一，水重貴文，松村成暢，都築巧，井上和生，伏木亨
33.長鎖脂肪酸摂取に対する報酬系ドーパミン作動性神経の応答	共	2009年5月	第63回日本栄養・食糧学会大会 長崎ブリックホール	安達真一，遠藤裕紀，松村成暢，都築巧，井上和生，伏木亨
34.口腔内刺激に依存した油脂の嗜好性評価	共	2007年5月	第61回日本栄養・食糧学会大会 国立京都国際会館	齋藤勝義，米田武志，水重貴文，安達真一，松村成暢，眞鍋康子，都築巧，井上和生，伏木亨
35.Opioid拮抗薬投与が油脂摂取パターンに与える影響	共	2006年7月	日本味と匂学会第40回大会 九州大学病院地区・医学部百年講堂	齋藤勝義，水重貴文，安達真一，米田武志，松村成暢，都築巧，井上和生，伏木亨

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3．総説				
1.高尿酸血症を抑制するファイトケミカル素材 Phytochemicals with Anti-hyperuricemic Potential: Studies in Cultured Hepatocytes and Purine Bodies-Induced Hyperuricemic Model Mice	共	2018年12月	New Food Industry Vol.60(12), pp. 19-26	矢ヶ崎一三，安達真一
2.イチゴを含む食品素材中ポリフェノールの糖尿病と高尿酸血症に対する作用		2018年6月	日本ポリフェノール学会雑誌 Vol.7, No.1, pp. 42-48	矢ヶ崎一三，近藤真司，安達真一
4．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.そば成分特にルチンとその関連成分の尿酸産生と高尿酸血症に対する作用について―インスリン抵抗性との関連も含めて― Preventive and alleviating effects of buckwheat and its main component, rutin, and related phytochemicals on hyperuricemia and insulin resistance	共	2021年11月	New Food Industry Vol.63(11), pp. 783-789	安達真一，小山美冬，近藤真司，矢ヶ崎一三
2.糖尿病・脂質異常症・高尿酸血症と食品素材	共	2017年8月	食品化学新聞社 FOOD STYLE 21 第21巻8号, pp.54-59	矢ヶ崎一三，安達真一，近藤真司
6．研究費の取得状況				
1.抗高尿酸血症作用を有する食品成分の探索および新規スクリーニング系の構築	単	2022年4月～2026年3月	科学研究費補助金 基盤研究(C)	研究代表者
2.小麦ふすまおよび果菜成分の腸内細菌代謝産物による高尿酸血症および2型糖尿病の軽減と作用機構解析	共	2022年4月～2023年3月	公益財団法人 飯島藤十郎記念食品科学振興財団 特定課題研究	安達真一（代表），吉澤史昭
3.食脂肪の嗜好性の形成および維持に関する生化学および動物行動学的研究	単	2018年4月～2023年3月	科学研究費補助金 若手研究	研究代表者
4.細胞培養系を用いた尿酸動態機能検定系の構築と天然物・食品由来成分の作用解	単	2016年4月～2018年3月	科学研究費補助金 若手研究(B)	研究代表者

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
析				

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2010年4月～現在	日本農芸化学会
2.2009年4月～現在	日本栄養・食糧学会